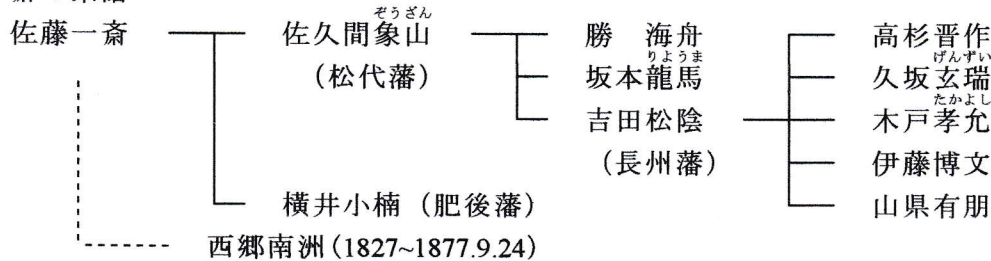


第142回 三方限古典塾（'18, 8, 16）

「南洲翁手抄言志録」（その1）

言志録とは 著者・佐藤一斎（1772～1859.9.24）美濃・巖邑藩の家老の家柄 昌平黌の儒官
 言志録（42～53歳・246条） 言志後録（57～67歳・255条）
 言志晩録（67～78歳・292条） 言志壘録（80～82歳・340条） 合計1133条
 論語・先進篇24「各々其の志を言う也」等が書名になったといわれている。

佐藤一斎の系譜



南洲翁手抄言志録とは

西郷南洲は「言志四録」を愛誦し、その中から101条を抄録して座右の誠いましめとしていた。西南戦争でも最後まで身につけて歴戦した。明治10年に西郷自刃の後、日向高鍋藩藩主の三男で、明治天皇の侍講秋月種樹あきづきたねたつが鹿児島に来遊した際、南洲翁の叔父・椎原國幹の家において抄本を觀、之を借りて日向に帰り評言を附した。明治21年に山県有朋の題字、副島種臣の巻頭言、勝海舟の南洲詠詩を冠して刊行されたものである。

- 1 遊惰ゆうだを認めて以て寛祐かんゆうと為すこと勿れ。嚴刻げんこくを認めて以て直ちよく諒りようと為すこと勿れ。
 私欲しよくを認めて以て志願しがんと為すこと勿れ。 (4-210)

(意識) 遊び怠けているのを見て、心が寛くてこせついでいないと思うな。厳しくて容赦しないのを見て、真直で偽りが無いと思うな。利己的な欲望はしに奔っているのを見て、志を立ててその実現を望み計っているものと思うな。

(余説) 現世でも「似て非なるもの」が溢れています。人物の判断においても偽物にせものを見誤らないことが重要です。これが書かれた1850年代の幕末は、攘夷か開国か、尊皇か佐幕か公武合体かなど混乱を極め、また憂国の士を気どって出世を図る者、財や色などの私欲に奔る者、凝り固まった信念に固執する者などが入り乱れていました。身内でさへも誰が味方で誰が敵なのか分からない、正に混沌とした状況にありました。

(参考) 論語・季氏篇4「孔子曰く、益するものの三友あり。直ちよくなるを友とし、諒りようなるを友とし、多聞たぶんなるを友とするは、益するなり。」 (では、有害となる三種の友とは?)

- 2 毀誉得喪きよとくそうは、眞しんに是れ人生の雲霧こんめい、人をして昏迷こんめいせしむ。此の雲霧こんめいを一掃いつそうせば、則ち天青く日白し。 (4-216)

[評] 徳川慶喜公は勤王の臣たり。幕吏の要する所となりて朝敵となる。猶南洲勤王の臣として終りを克くせざるごとし。公は罪を宥し位に叙せらる。南洲は永く反賊の名を蒙る、悲しいかな。

(意識) 不名誉と名誉、成功と失敗は真に人生における雲や霧のようなものである。これが人の心を暗くし、迷わしめているのである。この雲霧である毀誉得喪をさらりと一掃すれば、天が青く日が白く輝くように人生は誠に明るいものとなる。

(余説) なぜ南洲が1条と共にこの条をまず選んだのか、南洲自身の離島幽囚の経験や、幕末から維新前後の混乱した世相を考えると、その心境がよく分かるように思います。

南洲も自刃12年後の1889年、帝国憲法発布の成典に、慶喜公と同様に賊名が除かれ、正三位に叙せられたことを思うと、この章の持つ意味の深さが今更ながら実感されます。

(参考) 西郷隆盛漢詩集・64 「偶成」

世上毀誉輕似塵 眼前百事偽歟眞 追思孤島幽囚樂 不在今人在古人

(世上の毀誉軽きこと塵に似たり 眼前の百事偽か眞か

追思すれば孤島の幽囚の楽しみ 今人に在らずして古人に在りき)

3 唐虞の治、只だ是れ情の一字のみ。極めて之を言え、万物一体も、情の推に外ならず。 (4-251)

[評] 南洲、官軍を帥ゐて京師を發す。婢あり別れを惜みて伏水に至る。兵士環つて之を觀る。南洲輿中より之を招き、其背を拊つて曰ふ。好在なれと、金を懷中より出して之に與へ、旁らに人なき若し。兵士太だ其の情を匿さざるに服す。

幕府砲臺を神奈川に築き、外人の來り觀るを許さず、木戸公役徒に雜り、自ら畚を荷うて之を觀る。茶店の老嫗あり、公の常人に非ざるを知り、善く之を遇す。公志を得るに及んで、厚く之に報ゆ。皆情の推なり。(推：考えなどを推し進める)

(意識) 理想的であつた堯帝と舜帝の政治は、要するに情の一事に帰着する。これを極言すれば、宇宙の万物は皆一体であつて、万物を一体ならしめるものは、何かというと結局、情を推し進めたものに外ならない。

(余説) 唐虞は共に中国古代の伝説上の聖人で、堯帝を陶唐、舜帝を有虞ともいい、共に徳をもって天下を治めた堯舜の治と賞せられ、二人だけ在位中に位を讓つたと伝えられます。

万物一体とは、中国思想上の主題であり、特に陽明学で重視されました。天地万物を一体と見なして、すべての存在をわが身の一部と見ることであり、「万物一体の仁」とも言われます。

南洲の情の篤さを示すエピソードは多数伝えられています。例えば征韓論に敗れ、帰郷して糞桶を担いで畑に行く途中、下駄の鼻緒が切れた武士が、農夫姿の南洲を呼び止めて鼻緒を直させた。それに対して南洲は唯々として直した。

戊辰戦争で敗れた山形・鶴岡の庄内藩では、厳しい処分を覚悟していたが何らの厳罰も恥辱も受けなかった。後日、それが南洲の指図だったことを知った藩では、家老の菅実秀以下藩士70名を鹿兒島に派遣・親交し、南洲の言葉や教訓を集録した。明治22年に南洲の賊名が除かれると、翌年1月にそれまで伏せていた「南洲翁遺訓」を刊行し、全国を脚巡回し広く頒布した。これも南洲の情の篤さ・人徳の偉大さを如実に物語っています。

(参考) 西郷隆盛漢詩集・57 「月照和尚忌日賦焉」 月照13回忌(明治3年)の弔詩

相約投淵無後先 豈図波上再生縁 回頭十有余年夢 空隔幽明哭墓前

(相約して淵に投ずるに後先なし 豈図らむや波上再生の縁

頭を回らせば十有余年の夢 虚しく幽明を隔てて墓前に哭す)